

論文内容の要旨

論文題目： 肝門部胆管癌に対する周術死のない拡大半肝切除術とその長期
生存成績についての研究

指導教官： 幕内 雅敏教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 11 年 4 月 1 日入学

医学博士課程

肝胆膵外科学専攻

氏名 脊山 泰治

目的：肝門部胆管癌に対する本研究の治療戦略の結果を示し、また予後因子、
外科医の役割を明らかにする。

背景：拡大半肝切除術は肝門部胆管癌に対する根治的治療と認識されつつある
が術後肝不全のリスクがあり必ずしも安全とはいえない。安全かつ根治性の高
い治療戦略が望まれる。

方法：肝門部胆管癌に対する連続 58 症例の拡大半肝切除術を施行した診療記録
からデータを収集した。拡大半肝切除術の術前に減黄処置、門脈枝塞栓術を施

行する適応基準を作成した。肝門部胆管癌に対する拡大半肝切除術の短期、長期成績を示し解析した。

結果：術前減黄処置は 39 例(67.2%)に、門脈枝塞栓術は 31 例(53.4%)に施行した。拡大半肝切除術の内訳は拡大右肝切除 27 例、拡大左肝切除 22 例、肝臓同時切除 9 例であった。術後合併症率は 43%、周術期死亡、術後肝不全はなかった(0%)。術後 5 年生存率は 40%であった。単変量解析では残癌の有無、リンパ節の転移の有無、神経周囲浸潤の有無が長期予後に関与した。切除断端が 5mm 以上で予後が良い傾向にあった。術前処置期間は長期予後の妨げにはならなかった。多変量解析ではリンパ節転移の有無が唯一の予後因子であった。

結論：術前減黄処置と門脈枝塞栓術を含む本研究の治療戦略は肝門部胆管癌に対する拡大半肝切除術のリスクを減少し、周術死亡を認めなかった。長期生存のための外科医の役割は十分なマージンのある治癒切除を目指すことである。